

小林優子 「心の花」 十月号「ほろ酔いインタビュー」いつもながら楽しく読ませていただきました。

いろいろな方々との交流が特に興味深く、今回のお話の中で、北海道に住んでいる私は、時田則雄さん、菱川善夫さん、高辻郷子さんとお話を嬉しく読みました。いつの日かまたご来道ください。

山本知子 十月号幸綱先生の「短歌の現在」を拝読し、裾野市を地図で探しました。

「十里木高原」の樹林を眺めて歩きながら、ご別荘のまわりの鹿やリスに驚いている中、目前に富士山がふわりと浮かんで見えました。ひととき楽しく想像の旅をさせていただきました。ありがとうございます。

鈴木りえ 「心の花」に入会させていただきましたのは、昭和63年の10月でした。昭和天皇が御病氣中で梅雨期からずっと雨が降り続いていた秋でした。短歌を詠むことが私の世界を広げてくれました。全国大会に参加して親しくさせ

ていただいた玉井慶子先生、住正様のことを生涯忘れないことでしよう。玉井先生とは、北品川教会で、斎藤牧師様のお話を聞いていたというご縁がありました。

昭和が過ぎ、平成のみ代も一年余となり、淋しい秋の暮となりました。これからも歌を詠み続け、健やかな心身を保ってゆきたいと存じます。「心の花」の方々に厚く御礼申しあげます。

西村徹 書写・書道は手本をよく見て似せて書くことが大切であると言われる。では何を手本にするか？言うまでもなく古典である。さまざまな名筆を学ぶことにより基礎を学び、その行く末に自分の個性あふれる書が確立されるのである。

古典を学ぶことなくして自分勝手な書は、それは単なる我流ということになる。我流はどこか嫌味があり、心を打つものにはならない。それに比べて古典をベースにして確立された個性ある書は気品があると思われる。翻つて、短歌

も記紀、万葉からたくさんの名歌・名句を読むことが歌詠みに必要なのであろう。

幼少期から書を勉強してきて、中年の四十五歳くらいから歌を詠み始めた私にとって、書道と短歌の共通するものを改めて感じる今日この頃である。誠に僭越ながら、「書歌人」(書道と短歌を楽しむ人)の道を歩いて行きたい。

美帆シボ 昨年の秋、服部崇さんの第一歌集『ドードー鳥の骨』が我が家に届いた。手に取つて、読む進むうち、次の一首にニヤリとしてしまった。

・ヤップ島の娘ふたりは肩を抱き
たをやかに根を垂らす木となる

服部さんがバリに赴任することになり、それまでお付き合いのなかった私は、先ず、フランス人の浮世絵師である故ポール・ジャックレーの絵画展にお誘いした。
寡黙な服部さんに私は一方的に話す形になり、「絵画を歌に詠む

のは難しいですよね。でも、幸綱先生はそれが上手い」などと言った記憶がある。この展示を歌に詠みましようか、とか調子の良いことを言つて、私はしなかったが、服部さんはちゃんと詠んでいたのだ。この歌を読んで、当時の状況が甦った。熱心な服部さんとりヨンからバリに時折やつて来る松本実穂さんの三人で、オデオンの日本料理をミニ歌会の場合として細々始めたのがバリ短歌クラブの発端である。

バリ短歌クラブ二年目からは第三土曜日を歌会と決め、三年目からは様々な趣向を加えた。

十時三十分から二時間 歌会
十二時三十分から一時間 昼食
十三時三十分から三十分

「私の好きな一首」の紹介
十四時から一時間 勉強会
とまるで学校の授業みたいだが、時間割を作つて、途中退席や途中参加ができるようにしている。

参加者は様々な活動をしている